

最優秀賞受賞にあたって

滋賀県草津市教育委員会

やまもと ひろゆき

山本 寛之



この度は、このような栄誉ある賞を賜り、誠にありがとうございます。審査いただきました先生方や、東京書籍株式会社、中央教育研究所のみなさまにも感謝を申し上げます。

現在は、教育現場を離れ、教育行政職員として教育に携わっております。草津市教育委員会では令和4年度より「ESD」（持続可能な開発のための教育）の取組に力を入れており、今回の実践は私の担当教科である英語科と総合的な学習の時間との教科横断的なESDの実践の1つであります。

本日は、生徒とともに考え、実践を重ねてきたことを通して感じていることをお話させていただきました。

この実践は、生徒だけでなく、私たち教師自身もまた、課題を発見し続ける存在でありたいという思いが出発点にありました。私たちの身の回りには、日常が当たり前として流れていく中で、見過ごされやすい課題が数多く存在しています。

だからこそ、学校での授業は、課題発見力を身に付けるための非常に良い機会になると考えていました。学校での授業は、答えを覚えるためだけの時間ではなく、日常の中にある違和感に気づき、問いを立て、自分なりに考え続ける力を育てる場です。そしてその力は、「これからの人生をどのように生きていくのか」という目的意識につながっていきます。学校は、その出発点を与えてくれる、かけがえのない場所だと感じています。

実際の取組では、学校、地域、生徒それぞれが抱える課題と向き合ってきました。学校には地域とのつながりが弱いという課題があり、地域には身近な資源の価値が十分に共有されていないという課題がありました。また、生徒は、学んだことを自分事として捉え、行動へと移すことに難しさを感じていました。

こうした課題に向き合う中で、「琵琶湖」という身近な存在が学びの中心となり、活動は地域から世界へと広がっていきました。さらに英語を、単なる教科としてではなく、自分たちの考えや課題を他者に伝え、対話し、協働するための手段として用いたことで、生徒は英語を学ぶ意味を実感していきました。

この実践で私が大切にしてきたのは、答えを急がず、「何が課題なのか」を問い続けることでした。その過程で、生徒はもちろん、私自身もまた学び続ける存在であることを強く実感しました。このような姿勢こそが、これからの社会を生きていく上で、何よりも大切な力であり、松原G-GRIT学習の名称の原点にもなっています。

最後になりますが、この実践をともに作り上げてくれた生徒たち、日々教育現場で試行錯誤を重ねてきた教職員の仲間、そして本取組を支えてくださった保護者、地域、行政、関係機関の皆様、心より感謝申し上げます。

この実践が、学校を「課題発見力を育み、人生の目的を見いだす場」として捉え直す一つの

きっかけとなることを願い、私からの受賞の言葉
とさせていただきます。

本日は誠にありがとうございました。